

「言い換え前触れ」のテ形について

吉田 妙子

要 旨

テ形の用法の中に、前項の事象を後項で言い換える「言い換え前触れ」の用法が存在する。その述語の種類は、a. 言語活動に関する動詞、b. 判断形容の述語、c. 内容を求める動詞、の3種である。それぞれ前項は評価的・判断的・概念的で、後項は記述的・現象的・内容限定的であり、前項のくわしい内容を後項において従えているという関係である。その言語的特徴は前項と後項の「交換可能性」、および前項に対する後項の修飾性である。これは〈並列〉と同様、前項と後項が同存性を保ちつつも独立性を有しているが、前項と後項が内的意味連関を有することによって他の用法との連続も見られるのが〈並列〉と一線を画するところである。この「言い換え前触れ」の用法は、既存のどの分類にもあてはまらない用法と言える。

【キーワード】「言い換え前触れ」のテ形、内容を従えるテ形、前項と後項の交換可能性、前項に対する後項の修飾関係、前項と後項の同存性

1. はじめに

テ形の本来の機能は文を一時中止するだけであり、その用法が特定されるのは前後の意味関係による。さらに用法が連続しているため、截然と区別することが困難なことも多い。仁田(1995)は生起時間関係および主体の異同関係からテ形を〈付帯状態〉〈継起〉〈並列〉の3つに大別しているが、この順番で前項と後項の意味関係の独立性が高くなっていくことが見られる。

しかし筆者は採集文例8010例のうち、上記の〈並列〉に相当する独立性を持っているにもかかわらず〈並列〉には分類できそうもなく、かといって他のどの用法にもおさまりにかぬような例に100例遭遇したのである。

- (1) 中にはあの男を罵って、画のために親子の情愛も忘れてしまう、人面獣心の曲者だなどと申すものもございました。(地)
- (2) 背の低い私を思いやってそう言った彼は、それでも子供のようにはしゃいで私の肩をゆすった。(白)
- (3) 粹者の中には、それを真似て足袋を履かない者も多かったといふ。

(い)

これらの例は前項と後項が同存する。しかし、前項と後項の関係は別個のものではなく、同一事態のことを言い換えて述べているとしか考えられないのである。さらに言えば、「前項の内容を後項に従えている」としか考えられないのである。前項のテ形は、後項の内容の「言い換え」を予告しているものにほかならない。そこでこのテ形の用法を仮に「言い換え前触れ」のテ形と呼ぶことにし、考察を進める⁽¹⁾。

2. 「言い換え前触れ」のテ形を作る述語の種類

「言い換え前触れ」のテ形を作る述語は、言語的特徴から次の3種が見られる。(採集例を補充するため、作例を二、三随所にはさむことにする。)

a. 言語活動を表す動詞

上記(1)のほかに、次のような例が見られた。

(4) 我々は最後にこの豊かな特彩をもつ意識現象としての「いき」、理想性と非現実性とによって自己の存在を実現する媚態としての「いき」を定義して、垢抜して(諦)、張のある(意気地)、色っぽさ(媚態)と云ふことが出来ないであらうか。(い)

(5) すでにダーウィンは、自然の梯子の上で遠くはなれている植物や動物がいかに「複雑な関係の網」で結びつけられているかを強調し、生物の生活いわゆる生態を、「自然の経済」(Economy of Nature)、「自然の政体」(Polity of Nature)とよんだ。(人)

これらは「罵る」「誉める」「強調する」「定義する」「呼ぶ」「読む」「茶化する」「うちあける」「だます」などの言語活動を示す動詞が前項の述語となり、後項の述語に「言う」「話す」などを伴って「罵って～と言う」「誉めて～と話す」などの形を取る。つまり前項述語で言語活動の価値的側面を規定し、後項で価値的に中立な「言う」「話す」などの動詞によってその具体的内容を決定する、という一定のパターンがあるようである。

b. 判断形容表現の述語

同一事象について前項・後項で二様に形容する場合、前項と後項が「言い換え」の関係を持っていることがある。これは静的な述語に限られる。

(6) その癖と申しますのは、吝嗇で、慳貪で、恥知らずで、怠け者で、強欲で一いや、その中でも取分け甚しいのは、横柄で、高慢で、いつも本朝第一の画師と申す事を、鼻の先にぶらさげている事でございます

しょう。(地)

(7) 彼はいつも通り普通にやさしくて冗談も言ったし、私も笑った。

(白)

(8) グジグジグジグジ冷戦状態で、ふたりが毎日梅雨空みたいに無言でいるよりは、思い切って殴り合いなどして、そのあとカラッとしている方がはるかにいいと思ひましてね。(孤)

(9) どうも彼は私がいつ気づくかを楽しみにしていたらしくて、にこにこ笑っていた。(白)

これらの例は、白川(1990)の言う「独立性の高いテ形・連用形」のうち「判断形容表現」と並行するもので、前項の述語で判断形容を行い、後項の述語でその具体的なあり方を述べるというパターンである⁽²⁾。白川によって「独立性が高い」とされているものは前項と後項で主語の交替や独立した主題が見られ、意味の切れ目を感じさせるものであるが、上記の例はそれに該当しない。これらは、「言い換え前触れ」のテ形と判断される。

c. 内容を求める述語

c類はa類・b類と違い明確な言語的特徴を備えているとは言えない。冒頭に挙げた(2)(3)の他に、次の例がある。

(10) かつてパヴロフは、神経系を電流系に比し、興奮と制止のたえざる交互作用・相互転換を電流系におけるスイッチの入・切、プラス、マイナスの転換にたとえたが、このたとえの正しさは、近年の電気生理学ならびにサイバネティックスの発展によっても証明された。(人)

(11) 彼はそういった「文章処女」たちに《下手に書け》と説き、生活体験を綴ることをすすめ、それを「ふだん記運動」と名付けているのだが、ではこの橋本の言いつけを守ってひとりの庶民が下手に書こうとつとめているうちに著しく文章が向上し、よし今度は生活体験じゃなく小説のようなものを書いてみよう、と決心したとしよう。(自)

(12) 或ひは更に二元性を強調して、一部分には平天井を用ひ、他の部分には懸込天井を用ひる。(い)

(13) アノ学生ハ、両親ヲ手伝ッテ服ヲ売ッテイル。

(14) 彼ハ味方ヲ裏切ッテ、敵ニ情報ヲ売ッタ。

(15) この温泉の町を以前に訪れた時は不精して終日湯に浸かっており、滝があるとは聞いたが見に行くことなど考えもしなかったのである。

(続)

- (16) それじゃ何時まで経っても肉の上りこはないから、今度は治療法を変えて根本的の手術を一思いに遣るより外に仕方ありませんね。
(明)

- (17) ゴミノ回収法が今月カラ変ワッテ、燃エナイゴミ八月、水ニナッ
タ。

これらの例は皆、(11)橋本の言いつけを守る＝下手に書こうとつとめる、(13)両親ヲ手伝ウ＝服ヲ売ル、など、前項の述語の中身が後項で具体化・補充されているものであり、前項述語と後項述語は内容的には同一の事態を指している。このようなc類の「言い換え」を予告する前項述語の特徴をあえて言うならば、「内容を求める述語」と規定することができよう。この「内容を求める述語」というのは、「不精する」と言えば「どうやって」「どんなふうに」、「変ワル」と言えば「どこが」「どのように」などという疑問が生じ得るような述語である。このような述語はほかに「親孝行する」「ゴマをする」「受けをねらう」「先回りする」「いたずらをする」など、多数考えられるであろう。この種の述語を持つ前項はテ形によって文を一時中止し、その具体相を述べる「言い換え」の後項を持ち得るであろう。

以上a類、b類、c類の例では前項と後項が、評価的・一記述的、判断形容・判断根拠、概念的・内容的、という意味関係になっており、いずれも前項が概括的・抽象的な表現で後項がその具体的な内容叙述になっている。

3. 「言い換え前触れ」のテ形の構文的特徴

3-1 「言い換え前触れ」のテ形の前項と後項の交換可能性

前項・後項の意味の独立性が高い場合は、前項と後項は交換可能になるはずである。前章で挙げた例の前項と後項の交換可能性を検討してみよう。

3-1-1 a類の述語の交換可能性

a類の述語はおおむね問題なく交換できるようである。

- (1') 中には画のために親子の情愛も忘れてしまう、人面獣心の曲者だなどと申して、あの男を罵るものもございました。
- (4') 我々は最後に、「垢[●]拔[●]して(諦)、張[●]の[●]ある(意気地)、色[●]っ[●]ば[●]さ(媚態)」と云って、この豊かな特彩をもつ意識現象としての「いき」、理想性と非現実性とによって自己の存在を実現する媚態としての「いき」を定義することが出来ないであらうか。
- (5') すでにダーウィンは、生物の生活、いわゆる生態を、「自然の経済」

(Economy of Nature), 「自然の政体」(Polity of Nature) とよんで、自然の梯子の上で遠くはなれている植物や動物がいかにか「複雑な関係の網」で結びつけられているかを強調した。

これらはみな非文にはならない。しかし、前項が後項の手段というニュアンスも感じられる(これについては、4で詳述する。)

3-1-2 b類の交換可能性

b類も同様に、ほぼ問題なく交換可能である。

(6') その癖と申しますのは、吝嗇で、慳貪で、恥知らずで、怠け者で、強欲で一いや、その中でも取分け甚しいのは、いつも本朝第一の画師と申す事を、鼻の先にぶらさげていて、横柄で、高慢な事でございましょう。

(7') 彼は冗談も言っていつも通り普通にやさしかったし、私も笑った。

(8') ふたりが毎日梅雨空みたいに無言でいて、グシグシグシグシ冷戦状態よりは、思い切って殴り合いなどして、そのあとカラッとしている方がはるかにいいと思ひましてね。

(9') 彼はにこにこ笑っていて、どうも私がいつ気づくかを楽しみにしていたらしかった。

(9')などは前項が後項の判断根拠というニュアンスも感じられるが、これは前述の「判断形容表現」にあたる例で、前項の述語で判断形容を行い、後項の述語でその具体的なあり方を述べるというパターンを逆にした結果と言えよう。

3-1-3 c類の交換可能性

a類、b類に比べて、c類は交換可能な述語と交換不可能な述語、そして交換しても非文にはならないが意味が微妙にずれてくる述語があり、いくつかの類型に分けられる。

① まず、例(10)はまったく意味のずれがなく交換可能である。

(10') かつてパヴロフは、興奮と制止のたえざる交互作用・相互転換を電流系におけるスイッチの入・切、プラス、マイナスの転換にたとえ、神経系を電流系に比したが、このたとえの正しさは、近年の電気生理学ならびにサイバネティックスの発展によっても証明された。

これは、「比する」「たとえる」という動詞がどちらかと言うとa類の言語活動を表す動詞に近い性質を持っているからであろう。

② 冒頭の(2)(3)および(11)~(14)の例は、やはり交換しても非文にはなら

ず意味も自然になるが、前項が後項の「手段」と感じられるむきもあり、用法が微妙にずれてくるようである。ここでは(12)(13)の交換例だけを挙げる。

(12') 或ひは一部分には平天井を用ひ、他の部分には懸込天井を用ひて、更に二元性を強調する。

(13') アノ学生ハ、服ヲ売ッテ兩親ヲ手伝ッテイル。

これについては、4で詳述する。

③ 例(15)を交換した場合を見てみよう。

(15') この温泉の町を以前に訪れた時は終日湯に浸かって不精しており、滝があるとは聞いたが見に行くことなど考えもしなかったのである。

この場合、「不精する」を後置すると「不精する」ことが目的であるかのような印象を受け、後項がやや重くなる。これについても、4で詳述する。

④ 例(16)(17)のように、前項の述語が「変える」「変ワル」の場合は明らかに交換不可能と思われる。

(16') それじゃ何時まで経っても肉の上りこはないから、根本的の手術を一思いに遣って治療法を変えるより外に仕方ありませんね。(×)

(17') 燃エナイゴミ八月、水ニナッテ、ゴミノ回収法ガ今月カラ変ワッタ。(×)

これは、以下の事情によるものであろう。次の例を参照されたい。

(18) 赤信号ガ変ワッテ、青ニナッタ。

(18') 赤信号ガ青ニナッテ、変ワッタ。(×)

(19) 党ガ分裂シテ、二ツニナッタ。

(19') 党ガ二ツニナッテ、分裂シタ。(×)

寺村(1987)によれば「青ニ」は「変ワル」の必須補語で、「二ツニ」は「分裂スル」の準必須補語である。変化の動詞の結果を示す後項は、前項に置かれる場合、

(18'') 赤信号ガ、青ニ変ワッタ。

(19'') 党ガ二ツニ分裂シタ。

のように補語の形をとるべきであろう。後項動作が前項動詞の必須補語(または準必須補語)になっている場合は交換不可能で、「言い換え前触れ」のテ形に分類され得ないようである。

以上、c類の述語について、①はまったく問題なく交換ができる場合(前項・後項の述語がa類に近い場合)、②③は交換可能だが意味が微妙にずれ

てきてテ形の他の用法との連続性を感じさせる場合（これについては4で後述）、④は交換不可能な場合（後項動詞が前項述語の必須補語または準必須補語になる場合）の3種に分類される。

3-2 「言い換え前触れ」のテ形の前項と後項の修飾関係

「言い換え前触れ」のテ形は、前項が抽象的・総括的な表現で後項が具体的な内容叙述になっているので、後項が前項を修飾する関係になっている。

以下、前項を体言化して後項にそれを修飾させる「連体テスト」を試みる。

- (1⁷) 画のために親子の情愛も忘れてしまう、人面獣心の曲者だなどと申す、あの男への罵り
- (2⁷) そう言った彼の思いやり
- (3⁷) 足袋を履かない（という）真似
- (4⁷) 「垢抜して（諦）、張のある（意気地）、色っぽさ（媚態）」と云ふ「いき」の定義
- (5⁷) 生物の生活、いわゆる生態を、「自然の経済」(Economy of Nature)、「自然の政体」(Policy of Nature)とよぶ、自然の梯子の上で遠くはなれている植物や動物がいかに「複雑な関係の網」で結びつけられているかの強調
- (6⁷) いつも本朝第一の画師と申すことを、鼻の先にぶらさげている 横柄さと高慢さ
- (7⁷) 冗談も言った彼のいつも通りの普通のやさしさ
- (8⁷) ふたりが毎日梅雨空みたいに無言のグシグシグシグシした冷戦状態
- (9⁷) にこにこ笑っている（という）、私がいつ気づくかを楽しみにしていたらしい様子
- (10⁷) 興奮と制止のたえざる交互作用・相互転換を電流系におけるスイッチのプラス・マイナスの転換にたとえる神経系の電流系への比喩
- (11⁷) 庶民が下手に書こうとつとめる（という） 橋本の言いつけの遵守
- (12⁷) 一部分には平天井を用ひ、他の部分には懸込天井を用ひる（という） 二元性の強調
- (13⁷) 服ヲ売ル 手伝イ
- (14⁷) 敵ニ情報ヲ売ル（トイウ）裏切り
- (15⁷) 終日湯に浸かっていた 不精
- (16⁷) 根本的の手術を一思いにやる（という） 治療法の変革
- (17⁷) 燃エナイゴミ八月・水ニナル（トイウ）ゴミノ回収法ノ変化

以上のように、後項述語を名詞化するか、または「という」のような内容引用の語を入れれば、連体テストは成功する。

4. 他の用法との連続

3で、「言い換え前触れ」のテ形は前項と後項を交換すると意味関係にずれが見られることを述べた。「言い換え前触れ」のテ形は、前項と後項に意味関係を有することにより、他の用法との連続という現象が発生しやすい。

4-1 〈並列〉との連続

「言い換え前触れ」のテ形は、〈並列〉のテ形との類似が見られる。しかし次の2点において、やはり〈並列〉とは別個のものであると言わざるを得ない。

①仁田は、〈並列〉の中心的な特徴を「シテ節で表される事象と主節で表される事象が共存並立する関係にあるもの（同存性）」とし、さらにこの「事象の同存性」により事象間の独立性は高くなると言い、次の例を出す。

(20) 月川馨は冷然と、煙草の煙を吐き出して、動揺の色を見せなかった。(妖婦) [同一主体]

(21) 息子ハ明後日帰ッテキテ、娘ハ明日帰ッテ来ル。[異主体]

これらは節としての独立性が高く、前項・後項が構文上同等の位置づけを持つことから、前項と後項を交換しても文意は変わらないはずである。

(20') 月川馨は動揺の色を見せないで、冷然と、煙草の煙を吐き出した。

(21') 娘ハ明日帰ッテ来テ、息子ハ明後日帰ッテクル。

これらの文は、節相互が内的意味連関を持っていないからこそ交換可能と考えられる。

ところが、「言い換え前触れ」のテ形は、交換可能であるが、節相互の内的意味連関を有しているのである。これが、〈並列〉とは一線を画する第一点である。

②仁田(1995)は、〈並列〉の主体のあり様を異主体と同一主体に分け、前者を〈並列〉の典型的なものとしているが、異主体において3で述べた「連体テスト」が成立しないのはもちろんのこと、同一主体においてもそれは成功し得ない。

(22) 斎藤サンハ、白イ服ヲ着テイテ、髪ガ長イ人デス。

(23) 1年間ノ休暇ガアツたら、英会話ヲ習ッテ、車ノ免許ヲ取ル。

(22)は「彼」という実体に属する性質である。(23)は話者が思いつくまま

に列挙した行為であるが、「1年間ノ休暇」という前提のもとで話者の意識の中での「同存性」を持つ事象なのである。どちらも節相互の独立性が高いので、順序は随意に変えられる。

(22') 齋藤サンハ、髪ガ長クテ、白イ服ヲ着テイル人デス。

(23') 1年間ノ休暇ガアッタラ、車ノ免許ヲ取ッテ、英会話ヲ習ウ。

前項と後項の交換可能性という点では、「言い換え前触れ」のテ形と同じである。しかし、「言い換え前触れ」のテ形では「連体テスト」が成功するが、〈並列〉ではそれが成功しない。

(22'') 髪ガ長い白イ服ノ着用 (×)

(23'') 車ノ免許ヲ取ル英会話ノ学習 (×)

これらの二項は独立性が強いものだから、むしろ、

(22''') 髪ガ長イ齋藤サン/白イ服ヲ着タ齋藤サン

(23''') 英会話ヲ習ウ1年間ノ休暇/車ノ免許ヲ取ル1年間ノ休暇

のように、同存性の基軸から二翼に分かれるような連体修飾が成立するのみである。これは述語の修飾対象が明らかに「言い換え前触れ」の用法と異なっているからである。

4-2 〈付帯状態〉との連続

(15)のような文では、「不精して」を「終日湯に浸かっており」を修飾する副詞的な用法とする捉え方もある⁽³⁾。

仁田(1995)は、〈付帯状態〉を「し手容態」「心的状態」「し手動作」に大別しているが、「心的状態」が外的態度などとして現れるものは、「し手動作」に連続する、としている。「不精する」もこの類と考えられるが、実はこの類に「言い換え前触れ」のテ形が多く見られるのである。なぜなら「言い換え」の前項動作は評価的、後項動作は具体的な内容限定であるから前項に外から見えない心的態度を表す動作を示し、後項動作でその外から見える具体的なあり方を述べる、ということはあるからである。そのような述語「がんばる」を例にとってみよう。

(24) ガンバッテイイ大学ニ入ッタ。

(25) ガンバッテ数学ヲ勉強シタ。

(26) ガンバッテ二日間徹夜シタ。

これらは成田(1983)のテスト⁽⁴⁾によっても副詞的用法であることが確認され得るが、しかしこれらの前項と後項を交換すると、

(24') イイ大学ニ入ッテガンバッタ。(×)

(25') 数学ヲ勉強シテガンバッタ。

(26') 二日間徹夜シテガンバッタ。

となり、前項と後項の関係が異ってくる。(24')は、明らかにがんばる内容が(24)と違ってきてしまうので、「言い換え」とは言えない。これは、前項「ガンバル」と後項「イイ大学ニ入ル」の間に時間性・経過性が感じられるので、同存性が感じられなくなってしまうからである。また後項動作は前項動作の結果であり、通常は仁田(1995)の言う「起因的継起」に分類されるであろう。残りの二つを連体テストしてみると、

(25'') 数学ヲ勉強シタガンバリ。(?)

(26'') 二日間徹夜したガンバリ。

(26'')は無理なく成立するが、(25'')は特殊な状況(数学が苦手な人または数学が重視される状況)でのがんばりと取れる。後項述語のあり方によって(24)のテ形は「手段」性が強く、(25)のテ形は〈付帯状態〉性(成田1983の言う「副詞的用法」)が強く、(26)のテ形は「言い換え前触れ」性が強くなっているのがわかる。

4-3 「起因的継起」との連続

3-3で、c類の「言い換え前触れ」のテ形は、前項・後項を交換すると「手段」の用法へのずれが見られるものがあると述べた。仁田(1995)は、「起因的継起」からややずれる周辺的存在として「目的起因」と「方法的起因」を挙げているが、c類の述語はどれも意志的動作であり、前項の概念的把握を後項が具体的に詳述するのだから、前項が後項の目的因といった様相をも帯びてくる。たとえば(13)などは、「ために」の意味が読み取れる。

(13) アノ学生ハ、両親ヲ手伝ウタメニ服を売ッテイル。

前項が目的因なら、交換後の前項は、目的因と裏腹の関係にある作用因になり、「方法的起因」の様相を帯びてくることは想像に難くないであろう。

しかし、(14)などはやや無理である。

(14) 彼ハ味方ヲ裏切ルタメニ敵ニ情報ヲ売ッタ。(?)

前項が「目的起因」の意味合いを帯びてくるのは、あくまで個々の文脈によるとしか言えないのである。

5. 終わりに

この「言い換え前触れ」のテ形は、従来の分類のどの用法に属するであろうか。4で考察したように、「ために」で言い換え可能な例は仁田(1995)

の言うように、ある種の〈起因的継起〉に分類可能であるようだ。また、前項が仁田（1995）の言う「し手動作」にあたるものは、従来成田（1983）の言う「副詞的用法」（仁田の〈付帯状態〉の一部）と分類されていたようである。しかし、さまざまな用法へと分散されて分類され得る可能性はあっても、やはりこれらは「前項の内容を後項に従えるテ形」という一つのまとまった構文的特質を備えて存在している一群である、とすることができよう。

その前項と後項の独立性と同存性および交換可能性という点から見れば、〈並列〉に最も近い性質を有していると言える。しかし、前項と後項が異なった性質を持って同存するのではなく、同一の内容を後項で言い換え・詳述しているという点で、〈並列〉とは一線を画している。すなわち、「言い換え前触れ」のテ形はいわば、〈並列〉の横にコブのように位置している別種の用法、とでも言ったらいいのであろうか。

注

- (1) この論文は、「台湾日本語文学報 9」（1996）掲載の拙稿、『「言い換え」のテ形について』を、「言い換え」のテ形の名称・位置づけについて全面的な変更を加え、大幅に加筆修正したものである。
- (2) 白川（1990）は「独立性の高いテ形・連用形」を挙げ、その述語を3種に分類する。これらはすべてモダリティ・判断・存在のしかたなどを示す静的述語であることが特徴だが、それは「言い換え前触れ」のb類とある部分で重なっている。また前項と後項の関係が「一般的—具体的」「結論—根拠」「難解な表現—平易な表現」であることも似ている。しかしその言語的特徴である3点、(1) 後続する文が改めて主題を持つことができる、(2) 後続節との間に接続詞（相当語句）を挿入できる、(3) 話し言葉では文を完結させることができる、という事はb類に該当しない。
- (3) 成田（1983）は、副詞的に用いられるテ形の構文的特徴として「主節の動詞が要求する名詞句は自由に従属節の前に位置することができる」ことをあげているが、「不精して」もその性質を持っていると思われる。
- (4) 成田（1983）は、心的態度をあらわす動詞で、「～ヲ」をとるもののうち、その「～ヲ」であらわされるのが「ことから」である場合、その動詞の「て」形を副詞的に用いるのとほとんど同じ意味になる、として、連体テストを設けている。

参考文献

- (1) 白川博之（1990）『独立性の高いテ形・連用形について』広島大学教育学部紀要第

2 部第38号

- (2) 寺村秀夫 (1987) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- (3) 成田徹男 (1983) 『動詞の「て」形の副詞的用法—様態動詞を中心に—』渡辺実編「副用語の研究」明治書院所収
- (4) 仁田義雄 (1995) 『シテ形接続をめぐって』仁田義雄編「複文の研究」くろしお出版所収
- (5) 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- (6) 森田良行 (1980) 『基礎日本語』角川書店
- (7) 矢澤真人 (1987) 『連用修飾成分による他動詞文の両義性—状態規定の「デ」と他動詞文の修飾構成について—』国語国文論集第16号

用例採集文献

(明) 夏目漱石 (1916) 『明暗』新潮文庫/ (地) 芥川龍之介 (1918) 『地獄変』ちくま文庫/ (い) 九鬼周造 (1930) 『「いき」の構造』岩波書店/ (人) 芝田進午 (1961) 『人間性と人格の理論』青木書店/ (孤) 遠藤周作 (1974) 『孤狸庵うちあけ話』集英社/ (白) 吉本ばなな (1989) 『白河夜船』福武書店/ (続) 水村美苗 (1993) 『続明暗』新潮文庫/ (自) 井上ひさし (1984) 『自家製文章読本』新潮文庫

(中華民国・国立政治大学専任講師)